アネット・ミュンニッヒによるワットへの想い　　2020 年 09 月 09 日作

「ワッデンインディアン」

波がまだ浜辺の貝殻の山に打ち寄せていた。風が強まる。そして海はこの爽やかな風から逃れたいかのように、ゆっくりと忍び寄る。

浜辺が広がる。貝殻の山は色を失い、灰白色のチョークへと乾いていく。海は着実に底を太陽にさらしていく。海は後退するにつれて、あちこちのものを失っていく。石、貝殻、羽、サラダにできるような青菜などだ。地元の人たちによれば、とても緑豊かで、とてもヘルシーなのだそうだ。

漂流物の間に、ふと羽毛が散らばっているのに気づく。インディアンのジュエリーが頭に浮かぶ。骨の残骸が海藻に絡みつき、私の感覚がとっくに把握しているものを型取っている：

眠っている人、休んでいる人、熟考している人、リラックスしている人、考え込んでいる人？それとも取り残された人？無限の果てに取り残された人。

私は彼を見つけた。名もなきワッデンインディアンが、雪のように白い装飾品を身に着けているのを。彼は戦いのためにそれを身に着けていたのだろうか。それとも、海を旅するために海の肉を探していたのだろうか？それとも最愛の人との結婚のためにこのジュエリーを身に着けていたのだろうか？
何が起こったのだろう？なぜ海は彼を連れて行ったのか？そしてなぜ海はそれを宝物のようにここに預けたのだろう？見つかるはずだった宝物。
空想と現実、生と死の間の物語。事実と空想が錯綜し、私の思考を空回りさせる。
そうして時は過ぎ、月が反転を命じるまで、水とともに時は過ぎていく。そして月が戻ってきたとき、水は去ったときに失ったものを取り戻す。
眠っている者も、告白された者も、誰も彼を見逃すことはないだろう。注意深い目を持つ者だけが、彼や彼の白い羽根のアクセサリーを思い出すだろう。